

## イザヤ書15-16章「モアブの泣き叫び」

はじめに:モアブという国

### 1A 一夜のうちの荒廃 15

1B 北に響き渡る叫び 1-4

2B 南に逃げる人々 5-8

3B 残された者たちの血 9

### 2A 高ぶりによる喪失 16

1B シオンへの逃れの道 1-5

2B 絶え果てる喜び 6-12

3B 三年のうちの成就 13-14

## 本文

イザヤ書 15 章から読んでいきます。私たちは、13 章からユダとイスラエルの周囲の国々に対する神の宣告を読んでいきます。初めに、イザヤはバビロンを預言しました。バビロンがメディア・ペルシアによって滅んで、永遠の廃墟となることを預言しました。

そして 13 章 24 節以降に改めて、アッシリアがエルサレムを包囲するが、主がそこで彼らを打ち砕かれることを約束しておられます。大事なのは、「14:25 わたしはアッシリアをわたしの地で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリアのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。」と言っていることです。ユダをご自分の国、シオンの山をご自分の山と言われています。したがって、この方にこそ救いがあり、力があることを表しておられます。

しかし、周囲の国々が果たして、そのことに気づいているのか？ということが問題です。神を知らないと言っても、周囲の国々はイスラエルを見て、神がどのような方かその証しを目撃していました。ですから、光は照らされたのであって、弁解の余地はありません。これはちょうど、福音を伝えられる、クリスチャンに取り囲まれている人々に似ているでしょう。聞いてはいるのです、けれども、自分がその神に信頼を寄せるのかと言うと、そうではありません。それで、これまで通りにアッシリアの脅威に対して人間的な方法で解決策を練ります。反アッシリア同盟を結び、アッシリアに対抗しようとしていました。そうした外交活動を活発に行っていました。

そこで 14 章 28 節に、ペリシテへの宣告があります。彼らはユダが弱められると攻めていましたが、その反抗的な精神はアッシリアに対しても向けていました。それでアッシリアが南下してきた時にことごとく踏み荒らされます。そうなる前にペリシテはエルサレムに使者を送り、同盟を持ちかけてきた時に、イザヤはこう答えました。32 節です、「【主】がシオンの礎を据えられたのだ。主の

民の苦しむ者たちは、ここに身を避ける。」アッシリアに逆らうのでもなく、またアッシリアに服従し、従属するのでもなく、主ご自身に拠り頼みなさいというメッセージです。

### はじめに:モアブという国

15 章と 16 章は、主がモアブという国に対して語られた宣告、裁きの言葉です。モアブという国は、イスラエルの東、死海の東にある国でした。アブラハムの甥ロトとその娘の間に生まれた、近親婚によって生まれた子、アモンとモアブがいましたが、ですのでモアブはイスラエルと親戚の関係にあります。

主は、モアブの地を通ってはならないと約束の地に向かうモーセたちに命じられ、兄弟なのだから敵対してはならない、争ってはならないと命じられました。(申命 2:9)だから、彼らはモアブに何の害も与えなかったのですが、モアブの王バラクは、まじない師バラムを雇ってイスラエルを呪わせようしました。

つまり、イスラエルに敵対していましたが、けれどもダビデとは近い親戚になっていました。ルツがダビデの曾お祖母さんです。彼女がモアブ人であったけれども、あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です、と告白して、姑ナオミに付いていき、ベツレヘムでボアズとの間に子どもを生まれました。ですから、ダビデがサウルから逃げていた時に、両親を一時期、モアブの王に預けていたぐらいです。

このようなことで、モアブはユダの国に敵対していながら、それでも決して遠くない関係にありました。したがって私たちの生きている世界に合わせるなら、「神を信じている人のそばにいる人々」ということができるかもしれません。クリスチャンに接しながら、神について、キリストについて話は聞いています。そのことについて気にはなるものの、今の自分の生活は変えないという立場を取っている人でしょう。

そして、この預言が与えられたのは、おそらく紀元前 704 年ではないかと思われます。アッシリアの王がエルサレムを包囲し、神がその軍隊を滅ぼされる 3 年前です。エルサレムに、シオンに、目に見えないけれども主が砦を作っていてくださり、力強い王がおられるのです。ところが、モアブはイスラエルの神に頼ることなく、自分たちはこれまで攻められることがなかったので、安穩としていました。けれども、この預言の 3 年後に、アッシリアがヨルダン川の東にも攻め入ってきて、それでモアブの町々をことごとく滅ぼしていつている状態だ、ということです。

### 1A 一夜のうちの荒廃 15

#### 1B 北に響き渡る叫び 1-4

<sup>1</sup> モアブについての宣告。「ああ、一夜のうちにアルは荒らされ、モアブは滅び失せる。ああ、一

夜のうちにキルは荒らされ、モアブは滅び失せる。<sup>2</sup> モアブは宮に、ディボンは高き所に、泣くために上る。ネボとメデバのことでモアブは泣き叫ぶ。頭をみな剃り落とし、ひげもみな切り落として。<sup>3</sup> その通りでは、腰に粗布をまとい、その屋上や広場では、みな涙を流して泣き叫ぶ。<sup>4</sup> ヘシュボンとエルアレは叫び、その叫び声がヤハツまで聞こえる。それゆえ、モアブの武装した者たちはわめく。そのたましいはわななく。

先ほど話しましたように、モーセ率いるイスラエルは、主によって、モアブとは争ってはならないと命じておられました。けれども、モアブ人はイスラエルに敵対するようになります。バラムを雇ったのはモアブ人バラクでした。そして士師の時代には、モアブの王エグロンがイスラエルを虐げて、それで主がエフデという左利きの士師を起こしました。それから、ダビデの時代、ダビデはモアブを屈服させました(2サムエル 8:2)。それ以来、モアブは貢物を納める国、イスラエルに従属する国となりました。

けれども、イスラエルが神に背いて国が弱くされるに従って、モアブは背いていきました(2列王 1:1)。そして、北イスラエルは、あのシリアと手を結んでユダを攻めようとしたベカが王であった時に、アッシリアが攻めてきて、北イスラエルの多くの領土を取られました(2列王 15:29)。その中に、「ギルアデ」があります。そこはマナセの半部族やガドが住んでいた所です。こうしたイスラエル人が捕え移されていったところに、南に位置するモアブは自分たちのものとして、イスラエルのいくつかの町々に住んでいったのでしょう。

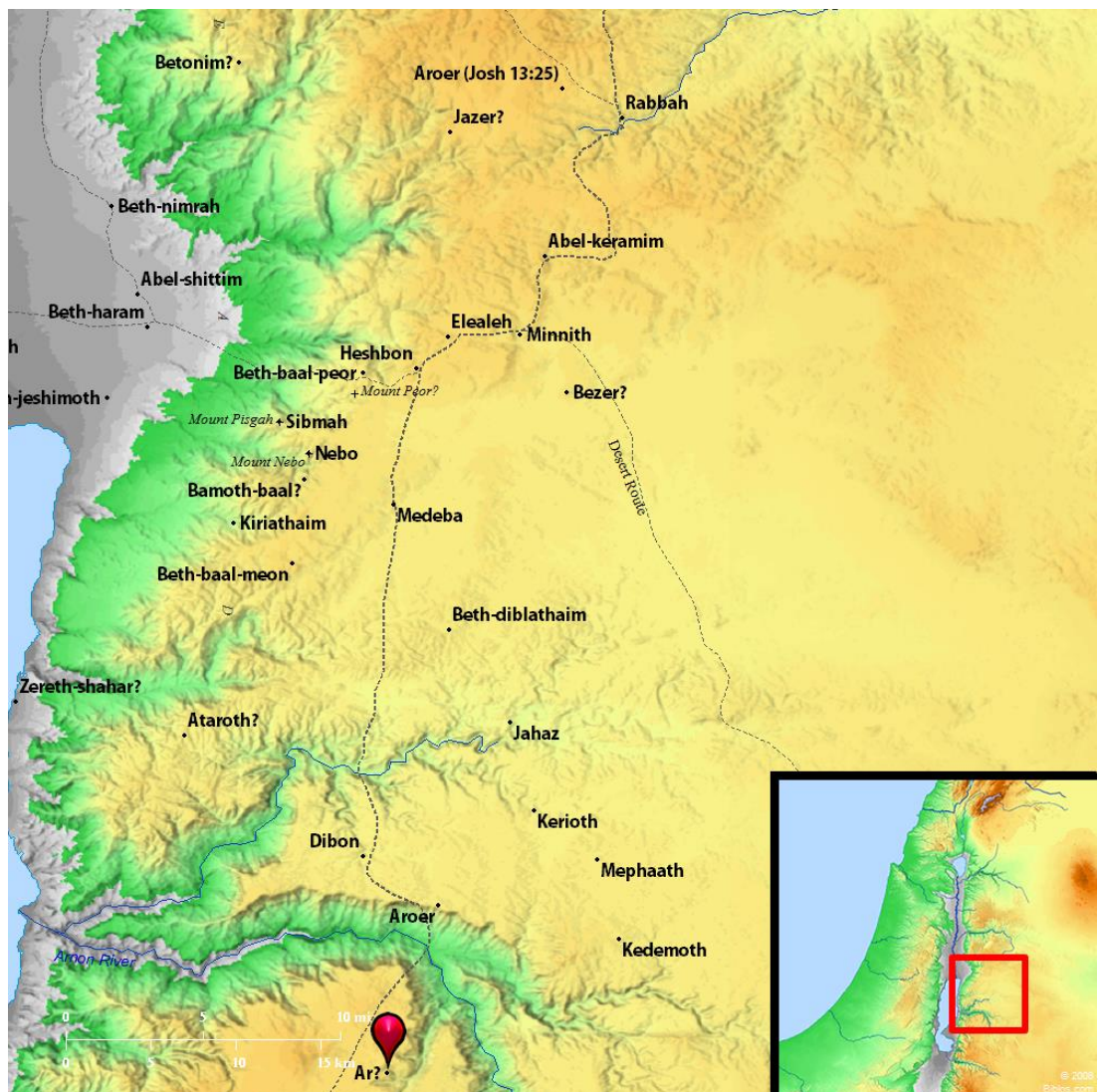
このようにして、モアブは、自分たちは戦って負けることはあったものの、住んでいる町々は攻められることは基本的にありませんでした。地形的には平らな高地にあり、北にあるギルアデは陰しい山地なので、北から攻めてくるには難しいところなのです。それに加え、アルノン川という深い溪谷が死海の中部に走っています。南は、死海南端に流れていくゼレデ川があります。ですから、地形的にかなり守られているのです。ところがそのために、自分が主なる神に頼ることの必要性を感じていないという、高ぶりへとつながっています。これが、私たちの生活に直接つながっています。つまり、「安定したところにある高ぶり」です。

1 節にある「アル」は、モアブの代表的な町です。初めはここが都と言われます。アルノン溪谷のすぐ南にあります。「キル」はモアブの首都であり、さらに南にある町で、今はヨルダンの「カラク」という町になっています。したがって、「一夜のうちに、京都が荒らされ、東京が滅んだ。」と言っている感じです。アッシリアが一気に攻めてきて、それでモアブ全体を侵略したということです。

そして、2 節はモアブ人たちが、自分たちの神ケモシュに祈っているけれども、何の役にも立っていない、ケモシュが自分たちを救っていないことで嘆き悲しんでいます。ディボン、ネボ、メデバは、アルノン川の北にある町々ですが、そこに宮があったのでしょう。ネボは、ネボ山のある町で、

そのすぐ横に、今はアラブ人クリスチャンたちが住む町メデバがあります。

そして3節は、屋上や広場において嘆き悲しんでいるというのは、一般の人々が生活の全てに対して荒らされてしまっている、ということです。一般市民を含む無差別殺戮をアッシリアが行なったということです。そして4節の、ヘシュボン、エルアレは、ディボン、ネボ、メデバよりさらに北にあります。そのずっと北にある叫び声が、ずっと南にあるヤハツにまで聞こえます。モアブがそこで戦っていて、アッシリアにことごとく滅ぼされ速やかに南下していくのを見て、叫んでいるのでしょう。



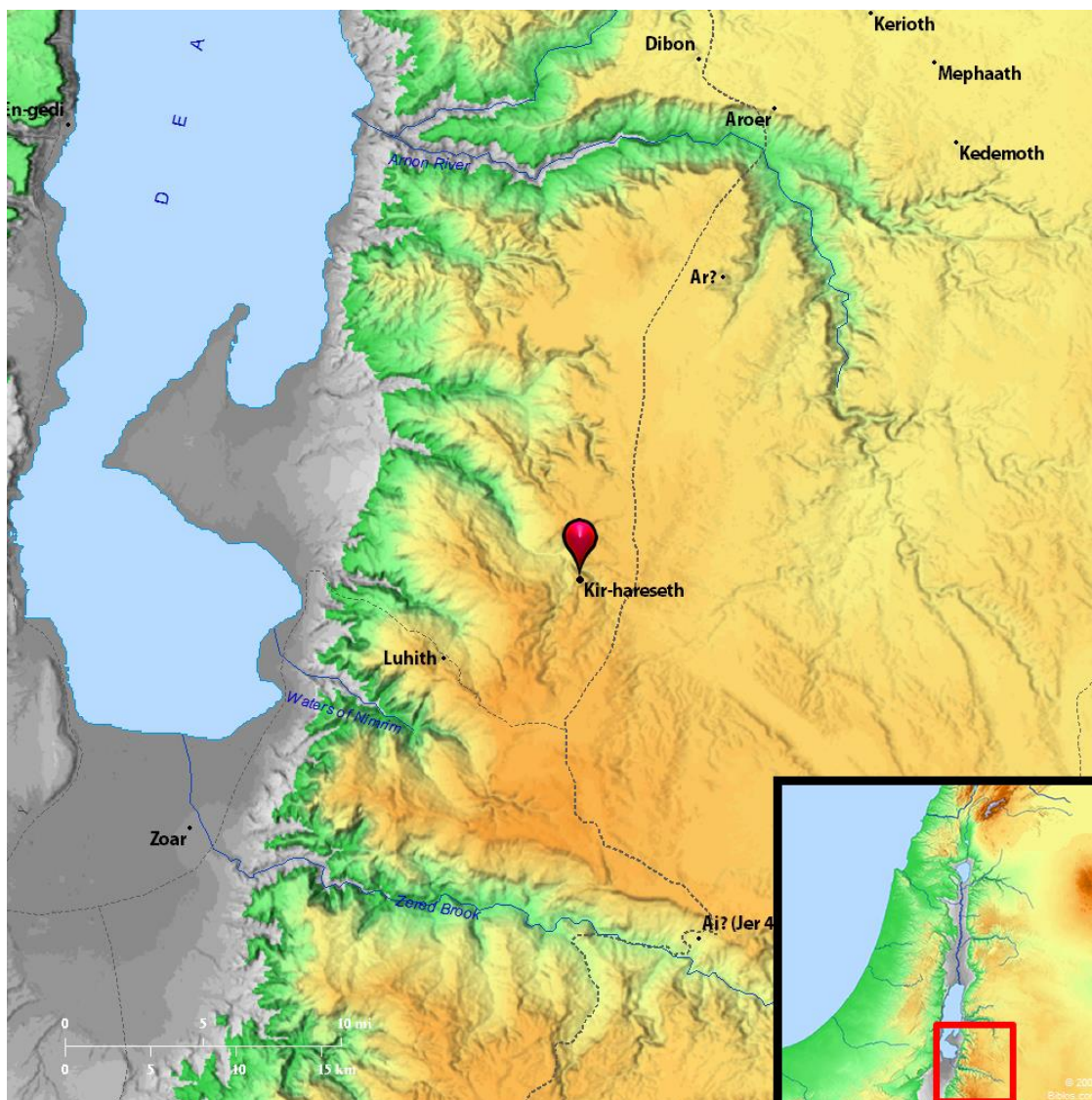
## 2B 南に逃げる人々 5-8

<sup>5</sup> わたしの心はモアブのために叫ぶ。逃げ延びる者たちはツォアルまで、エグラテ・シェリシヤまで逃れる。ああ、彼らはルヒテの坂を泣きながら登り、ホロナイムへの道で破滅の叫びをあげる。

<sup>6</sup> ああ、ニムリムの水は荒廃した地となり、草は枯れ、若草も尽き果てて、緑もなくなる。

<sup>1</sup> <https://bibleatlas.org/full/ar.htm>

モアブの人たちが必死に逃げています。ツォアルは死海南端の町で、そこからユダのほうに回って逃げようとしているのでしょうか。それから、ルヒテの坂、ホロナイムの道とは、死海が真ん中で細くなっていて、乾季には陸続きになるところです。ダビデが両親をモアブ人の王に託した時に、おそらくこの道を使ったのではないかと思います。これもまたそこを渡ろうとして逃げようとしているけれども、間に合っていない姿です。ニムリムは、死海南端に注ぐ溪谷です。アッシリアが他の土地を侵略するときに使った方法の一つに、水源を塞いでしまうことがあります。ニムリムの水を塞いだので、彼らの水がなくなり、またその地域の草木を枯らしていきました。



ここで注目したい言葉が、「わたしの心はモアブのために叫ぶ」であります。主がこの災いを起こしているのですが、しかしこの災いがモアブに降りかかることを叫んで、泣いておられるのも同じ主なのです。主は、シオンにこそ救いがあるとイザヤを通して語っておられるのに、ご自分のところに来れば安全であると語っておられるのにその言うことを聞かないなら、アッシリアの攻撃にさられ

<sup>2</sup> <https://bibleatlas.org/full/kir.htm>

るがままにするしかないのです。このことを最も願っておられないのは主ご自身であり、その涙をここで見ることができます。主は、悪者が滅びることを願っておられません。どんなに悪を行っていても、主はその者が立ち上がって、生きることを願っておられます。

<sup>7</sup> それゆえ彼らは、残していた物や蓄えていた物を、アラビム川を越えて運んで行く。<sup>8</sup> ああ、叫び声がモアブの領土に響き渡り、その泣き声がエグライムまで、その泣き声がベエル・エリムまで届く。

「アビラム川」はおそらくゼレデ川のことでしょう。つまり、今、モアブの国境を越えてエドム人の地に逃げていっているということです。大量の難民が発生した状態です。エグライムやベエル・エリムはどこにあるか分かりませんが、おそらく南端の町々なのだと思います。ついにモアブ全土が、北南まで、叫び声で埋め尽くされてしまいました。

### 3B 残された者たちの血 9

<sup>9</sup> ああ、ディモンの水は血で満ちる。わたしはさらに、ディモンにわざわいをもたらす。モアブの逃れた者、その土地に残った者に、一頭の獅子を。」

ディモンですが、これはディボンと同じだと思います。アルノン川の北側にある町です。ここでの「血」は、列王記第二 3 章にある、モアブ人の王メシャの時の出来事を思い出させるものです。メシャがイスラエルに反逆するので、イスラエルが南のユダと連合し、またエドム人もそれに加わり、エドムの荒野の道を歩いていましたが、水が尽きてしまいました。そこでエリシャが預言しましたが、「この涸れた谷には水があふれる。(3:17)」と言いました。けれども、実は他のところで雨が降っていたので、一気にその谷に水が流れて、水がいっぱいになりました。メシャが近づいてくると、朝日の反射でその水が赤く染まっていた。それを見て、「同士打ちをしているのだ」と思い込み攻めたところ、イスラエル軍がいて、イスラエルがモアブを打ちました。その後で、取り囲まれたメシャは、モアブの都キル・ハレセテで、なんと自分の長男をいけにえとして献げたのです。ケモシュの神はこんなことを要求するわけですが、こんなものを見ていられないとしてイスラエル人たちは帰りました。こんな話ですが、ケモシュの宮のあるディモンでは、水に反射する血の色ではなく、実際に血が流されていった。

そしてケモシュの神に対する裁きを続けて行なうと神は宣言されています。逃れて、なんとか生き延びていた残された者も、ついに獅子、アッシリアがやってきていて、絶対絶命になっています。

## 2A 高ぶりによる喪失 16

### 1B シオンへの逃れの道 1-5

<sup>1</sup> おまえたちは、子羊をこの国の支配者に送れ。セラから荒野を経て、娘シオンの山に。<sup>2</sup> モアブ

の娘たちはアルノンの渡し場で、巢から放り出されて、逃げ惑う鳥のようになる。」

アッシリアにモアブ全土を攻められて、逃れたわずかな者も食い尽くされそうになっている今、再びシオンの山が出てきています。そこに救いを求めなさいという呼びかけです。

「セラ」は、エドムの町です。そこにおそらく、使者を送ってユダの荒野を通り、エルサレムに行こうとしているのでしょう。「子羊をこの国の支配者に送れ」というのは、モアブはイスラエルに貢物として羊を納めていたからです(1列王 3:4)。指導部は、セラを避難所としていたのですが、モアブの人々はアルノン川のところでユダに渡ろうとして逃げまどっている状態です。

<sup>3</sup>「あなたは、助言を与え、事を決めよ。昼のさなかにも、あなたの影を夜のようにせよ。散らされた者をかくまい、逃れて来る者を渡すな。<sup>4</sup> あなたの中にモアブの散らされた者を宿らせ、荒らす者から逃れる者の隠れ家となれ。虐げる者が死んで破壊も終わり、踏みつける者が地から消え失せるとき、<sup>5</sup> 一つの王座が恵みによって堅く立てられる。ダビデの天幕で真実をもってそこに座すのは、さばきをし、公正を求め、速やかに義を行う者。

3-4 節前半は、モアブの指導層がエルサレムに向かって、我々逃げてくる者たちを匿ってくれと願っているように見えます。そして、「虐げる者がアッシリアで、アッシリアが消えてなくなる時に、ダビデの王座に着く者が、公正と義をもってすべ治める。だからこの方に頼れ。」と言っているように聞こえます。ヒゼキヤ王が、アッシリアがいなくなった後に、恵みによって堅く立てられて、裁きを行うということを預言しているのかもしれませんが。

しかし、5 節は明らかにキリストが王として地上に戻ってこられる時、主はエルサレムのオリーブの山に立たれることの預言です(ゼカリヤ 14:4)。そうすると、その前の 3-4 節は、モアブ人が逃れる人々を示しているだけでなく、終わりの日では、その逃れた者たちというのは、ユダヤ人ではないか？と思われるのです。モアブの地に逃れて来ているユダヤ人ではないか？と、他の箇所でも預言されていることに関連するかもしれません。

主が十字架につけられる直前、オリーブ山で弟子たちに世の終わりについて語られた時に、主は「逃げなさい」と命じられましたね。「マタ 24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいたる人たちは山へ逃げなさい。」ユダヤから山に逃げる、というのは、西でもなく南北でもなく、死海のほうに広がる荒野の山々のことです。

そして黙示録 12 章を読みますと、イスラエルを意味している女を悪魔である竜が追いかけている場面があります。「12:14 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場

所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。」荒野に飛んでいったとありますが、先ほどのイエス様の命令と同じです。そして、「黙 12:15-16 すると蛇はその口から、女のうしろへ水を川のように吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。しかし、地は女を助け、その口を開けて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。）」荒野に逃れたユダヤ人たちは、そこで悪魔また反キリストによる攻撃から、かろうじて守られるという約束です。

その地域がモアブであり、ここイザヤ 16 章にあるモアブへの預言は、アッシリアから逃れるために、シオンが隠れ場になるという約束だけではなく、荒らす忌まわしい者、反キリストから避ける場所として、主がユダヤ人のために設けてくださるところの預言でもあるのです。ダニエル書 11 章の最後に、反キリストが世界戦争を起こし暴れる預言がありますが、「ダニ 11:41 彼は美しい国に攻め入り、多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。」とあります。エドム、モアブ、そしてアンモンは今のヨルダンです。ここにある地形、特に、エドムにあるボツラは、岩に取り囲まれた要害です。ペトラが、ボツラだと言われています。

そして、反キリスト率いる諸国の軍隊が、ボツラに向かって攻めてきます。しかし、主がその時に戻ってこられて、彼らと戦われます(イザヤ 34:5-8)。そして、主戦場はエルサレムに戻ります。その時に、ボツラからエルサレムまでの広範囲にわたって、血の海になることが予想されます。黙示録 14 章の最後には、血が 1,600 スタディオンに広がると言われています。それが、ボツラからエルサレムまでの約 300 キロとほぼ同じ距離です。

## 2B 絶え果てる喜び 6-12

<sup>6</sup> われわれはモアブの高ぶりを聞いた。彼は実に高慢だ。その誇りと高ぶりと不遜さ、その自慢話は正しくない。

主がシオンから、恵みをもって支配されるのだという救いの道を聞いていながら、モアブは、結構だとして、その救いを拒んでしまいます。それは、高ぶりであるということです。

<sup>7</sup> それゆえ、モアブはモアブ自身のために泣き叫び、すべての者が泣き叫ぶ。ただ打ちのめされて、キル・ハレセテの干しぶどうの菓子のために嘆く。<sup>8</sup> ヘシュボンの畑もシブマのぶどうの木も枯れた。国々の主たちがその房を打ったのだ。その房はヤゼルに達し、荒野を巡り、つるは伸びて海を越えていたのに。

主は、何をもってモアブを高ぶっていると言っているかと言いますと、ぶどうの収穫に代表される生活の充足です。「私は神を信じるまでもなく、十分幸せだよ。」という態度、これこそが高ぶりがあります。ヘシュボンやシブマでとれたぶどうは、荒野を越えてつるが海まで行ったということですが、地中海のことでしょうか。そうするならば、「私たちは十分にイスラエルにもぶどうを産出してい



るしね。」と自慢している訳です。私たちは高ぶりや奢りという言葉を書く時に、威張り散らすというイメージがありますが、聖書はこのように「自分たちだけで十分やっていけますから。」として、主なる神にすがることがないことを高ぶりと呼びます。

<sup>9</sup> それゆえ、わたしはヤゼルのために、シブマのぶどうの木のために泣く。ヘシュボンとエルアレよ、わたしはわたしの涙でおまえをぬらす。おまえの夏の果物と収穫を喜ぶ声が絶えてしまったからだ。<sup>10</sup> 喜びと楽しみは果樹園から取り去られる。ぶどう畑の中で喜び歌うこともなく、大声で叫ぶこともない。踏み場でぶどう踏みをする者も、もう踏まない。わたしが喜びの声を絶えさせたのだ。

主がご介入される時に、世の楽しみはすぐに過ぎ去ります。主にある喜びと楽しみは永らえますが、主のいない者たちは、自分たちが頼りにしている収穫がなくなった時、その喜びは完全に絶えてしまいます。

<sup>11</sup> それゆえ、わたしのはらわたはモアブのために、わたしの内臓はキル・ヘレスのために、豎琴のようにわななく。<sup>12</sup> モアブが高き所に詣でて、そこで身が疲れ果てるまでのことをしても、その聖所に入って祈っても、何にもならない。」

イエスが、羊飼いのいない羊のように群衆が迷っている時に、かわいそうに思われたとありますが、それは肝臓からでてくる感情です。腹で感じるものです。ここでも同じですね、はらわた、内臓がわなないています。主は、モアブを裁かなければいけなかったのですが、そのことをするのは、はらわたがわななくほどの哀しみでした。これが、主が悪い者が滅びる時に抱いておられる感情です。敵が滅びるのを、よしとされないのです。

そしてもう一度、彼らの信じている偶像礼拝は無駄であることを語っておられます。偶像礼拝は、自分の都合に合わせています。しかし、自分たちのものが奪われる時に、助けが必要な肝心な時には、何の役にも立ちません。しかしまことの神は、私たちが自分たちのものが取り除かれる時にこそ、その真価が発揮されます。主は、貧しい時に救われる方であり、満たす方です。

### 3B 三年のうちの成就 13-14

<sup>13</sup> これが、以前から主がモアブについて語っておられたことばである。<sup>14</sup> 今や主は次のように告げられる。「雇い人の年季と同じ三年のうちに、モアブの栄光は、そのおびたしい数の群衆とともに軽んじられ、残った者もしばらくすれば力がなくなる」と。

アッシリアが攻めてくる前に、イザヤが前もってモアブに告げていました。何度となく伝えていましたが、彼らは聞く耳を持っていませんでした。

けれども、今は、雇い人の年期のように、期間が非常にはっきりしている、確かである、ということです。三年と言っていますから、預言が行なわれた時はここから紀元前 704 年ではなかったと思われる。701 年にアッシリアがこの地域に南進してくるからです。そして、「モアブの栄光は…軽んじられ」とあります。モアブはこれこれができている、と思っても、アッシリアが攻めてきた時には多くの人は頼りにしません。軽んじられます。

以上が、モアブに対する宣告でしたが、ペリシテと比べるとよいでしょう。ペリシテは、いつもユダに戦ってきた国でした。いつも反抗して、すきを見ては戦いを挑みます。それは、アッシリアに対しても同じでした。それで、アッシリアに滅ぼされました。シオンに救いがあるのに、戦うことを選んだのです。それに対してモアブは、いつも自分たちが守られているので安住していました。だから、アッシリアが攻めてきているのに、自分たちは大丈夫だと思っていました。自分たちは大丈夫だとしているのは、神の他に頼ることがあるからです。戦って、主に頼らないこともあれば、安住して、主に頼らないこともあります。それぞれの国が、イスラエルのところにまことの神のおられることを知っていながら、自分たちの道を選んだのです。